

幼稚園新任教諭の植物知識に関する調査

How much knowledge about plants do the teachers have?
— Studying by questionnaire about the teachers of kindergarten. —

佐 藤 英 文

Hidebumi SATO

幼稚園新任教諭の植物知識に関する調査

How much knowledge about plants do the teachers have?

— Studying by questionnaire about the teachers of kindergarten. —

佐藤 英文*

Hidebumi Sato

要 旨

幼稚園新任教諭を対象として植物知識とそれらを使った植物遊びの体験について調査を行い、過去に行った保育科短大生および幼稚園保護者に対する同様の調査結果と比較を行った。この研究は先行研究(佐藤008, 2009)と全く同じ植物種について行い、保護者と短大生との違いを確認した。その結果新任教諭では「よく知っている」種の平均は15.9種(保護者は17.9種、短大生は12.9種、以下同じ)、「聞いたことがある」種は平均9.1種(9.3種、10.5種)、「知らない」種は22.0種(19.8種、23.6種)であり、「聞いたことがある」を除いて保護者と短大生の間型の傾向を示した。よく知っている割合が多い10種の植物について遊び体験種類数を調査したところ平均3.5種類(保護者7.5種類、短大生5.3種類)で保護者や短大生よりも少ない値を示した。これらの結果を基に、今後保育者養成校などと連携をとりながら、自然環境と親しむ教育方法を探る必要性が示唆された。

キーワード：幼稚園新任教諭 植物知識 遊び体験

1. 保育者に生き物の知識は必要か？(序にかえて)

幼児を自然環境の中で育てる意義は広く認識されており、幼稚園教育要領や保育所保育指針(2008)にもその重要性が盛り込まれている。その観点から、保育者養成校においても何らかの形で自然に関する内容が取り上げられ実践されていると考えられる。

ところで、自然を活用した教育を目指すとき、子どもと自然との介在者として教師は大きな役割を果たす。特に、教育者の植物や動物に対する基礎知識は、子どもたちにそのすばらしさを感じてもらうために極めて重要な要因であると考えられる。たとえば、大澤ら(2008)は「身近な暮らしや自然について知っておきたいこと」「草花遊びで知っておきたいこと」などの項目を設けて、教師になるべき学生たちが身に付けるべき幾つかの植物や植物遊びに関する基礎知識を紹介している。

一方、生き物に関する知識を子どもたちに伝授するだけの知識教育に終始するならば、これは教育的な配慮を著しく欠いているといえるであろう。『子どもからの質問に答えないのは恥とばかりに「これはウシハコベ」とか「あれはオオイヌノフグリ」と花の名前を告げるだけの対応では、聞いた本人も「ああ、そう」で終わってしまい、興味は次に移るだろう。』と北野ら(2002)が述べるように、子どもの関心をむしろ低下させてしまう危険性すら生じる。北野らはさらに続けて『むしろ、こんな場合はあえて名前を告

げずに、「きれいだね」とか「かわいいね」といって子どもの気持ちに共感を表しつつ、「花びらに変わった模様がっているよ」とか「どっちの花がおしゃれだと思う?」「○○ちゃんならどんな名前をつける?」など、対象をよくみる方向の発問をするほうが、はるかに効果的ではないだろうか。』と教師のあるべき姿を述べている。また、筆者がドイツのドレスデナー森の幼稚園を視察(2008)した折に「植物の名前に関してはどう考えているか?」と質問したところ、園長は「名前を知することは重要ではない、むしろさまざまな生き物に気づき感じる事が大切なのだ。」と北野らと同じ意見を述べていた。

では、生き物の名前を知することは単に知らないよりもましな程度のことなのであろうか。本校短大の保育科学生に環境・生活・総合演習などを通じて身近な生き物たちをどのように保育に取り入れていくか、という授業を実践しながら「知らないよりもまし」という考えにいささかの違和感を抱える。例としてふさわしくないかもしれないが、幼稚園や保育園の教師が新入園児を迎えるとき、まず子どもたちの名前を覚える。また、教育実習に向かう学生たちには、子どもたちの名前を早く覚えなさい、と指導する。もちろんこのときの名前を覚えるという作業は、単に名称を暗記するという意味ではない。名前を通して子どもの特長や性格、親との関係などを理解するのである。生き物の名前を覚えるときにも同様のことが言えるのではないだろ

* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

うか。

学生に対する指導を通じて、五感を使って生き物と接するとき、その生き物の名前を知ることが重要な意味を持っているように思える。たとえばある植物について学ぶ場合、名前と共にその特長を調べ（感じ）さらにこれを利用してどのような遊びができるか、など「名前」に「体験」が伴うように学んだ方がはるかに効果的である。一方、名前を覚えずに植物の特長や遊びだけを学習した場合には、その後の進展に支障をきたすであろう。もちろん、名前を覚えることの是非についての検証をすべきであるが、この点については現在方法を模索中である。現段階では、保育者の教養として生き物に対する知識は重要なのではないか、という疑問の提示に留めておきたい。

当然のことながら、これらの生き物に対する知識の必要性、を幼児に強要するものではない。あたかも受験の暗記科目の如く子どもたちが植物や動物の名前を機械的に覚えたならば、むしろ弊害の方が多いように思われる。筆者が必要性を強調したいのは子どもたちと接する「保育者」のあり方なのである。生き物を知っていることが不可欠の条件とはいえないが、少なくとも保育者を目指す者は最低限の知識を持つ必要があるだろう。もちろん、生き物の名前を手あたりしだい子どもたちに教える必要はない。あくまでも子どもたちの興味を喚起させることがまず求められるであろう。子どもたちが関心を示しそうな豊かな知識と多様な視点を兼ね備えてこそ、保育者として環境教育を効果的に進めることができるのではないかと考えている。

以上のような意味で「生き物の名前を覚えることの必要性」という視点に立ち、佐藤（2008、2009）は保育科短大生及び幼稚園保護者の現状を把握するため、植物知識や遊び体験について調査を実施した。その結果、横浜周辺に普通に見られる植物に対する知識量がきわめて少なく、これらを使った遊び体験も貧弱であることが明らかとなった。

今回は、神奈川県における幼稚園の新規採用教諭を対象としてこれまでと同様身近な植物に対する知識とそれを使った遊びの調査を実施した。これは、鶴見大学短期大学部の学生に加えて、神奈川県に就職した教員の実態を把握するためである。

本研究を発表するにあたり、アンケート調査にご協力いただいた神奈川県私立幼稚園連合会に心よりお礼申し上げます。

2. 調査方法

調査対象：神奈川県私立幼稚園連合会主催・新規採用教員研修会参加者

調査期間：2008年（平成20年）8月6日～7日

調査は平成20年度に採用された神奈川県内の新任幼稚園教諭を対象に実施した。これまでの調査例にならい、植物に対する知識、およびそれらについての遊び体験の有無を把握するために質問用紙を配布した。総持寺境内に見られるものを中心に44種（木本24種、草本20種）の植物を選び、よく知っている、聞いたことがある、知らない、のいずれ

か選択してもらった。またそれらの植物に対して遊びの経験の有無を答えていただいた。なお、調査に使用したアンケート内容は比較を容易にするため2007年10月から11月に短大保育科学生（以下短大生と表記）および同年10月から11月に附属三松幼稚園の保護者を対象として行ったものと全く同じである。したがって方法の詳細は佐藤（2008）を参照していただきたい。

3. 結果

3-1. 新任教諭の構成

本調査に回収できた用紙は239通であり、この中で記載漏れなどの不完全な回答が8通あったため、集計に使用したのは231通であった。このうち男性が2名、女性が229名であり、男性は全体の0.87%に過ぎなかった。佐藤（2008、2009）の場合以上に男性の比率が著しく低く、性比が全体に大きな影響を及ぼすとは考えにくいと、以後の結果報告や考察には男女差を考慮せずに進めていく。

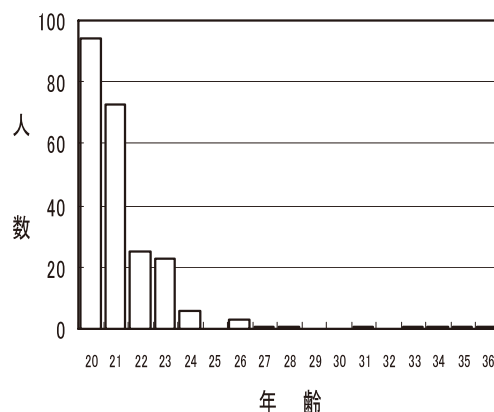


図-1. 回答した幼稚園新任教諭の年齢構成

本調査に回答した幼稚園新任教諭の年齢構成を図-1に示した。これをみると、20歳が94名で全体の40.7%を占めた。ついで21歳（73名、31.6%）、22歳（25名、10.8%）、23歳（23名、10%）、24歳以上（16名、6.9%）であった。アンケートに答えた教師のほとんどが25歳未満であり、その割合は全体の96%に達した。年齢構成からみて、大部分の教諭は卒業から1年未満であることが推定される。

3-2. 植物名の知識量について

佐藤（2008）の例にならって、横浜を中心に比較的容易に見られる植物種47種（3種は異名同種）について、「よく知っている種」「聞いたことがある種」及び「知らない種」を集計し平均値と標準偏差値のグラフを図-2(左)に示した。

「よく知っている種」の数は最多33種、最少0種、平均15.9(SD = ±5.4、以下同じ) 種であった。これに対して「聞いたことがある種」では最多21種、最少0種、平均9.1(±4.2) 種であり、「よく知っている」の値よりも平均値で6.8種も少なかった。さらに「知らない」と答えた数は、最多36種、最少6種、平均22.0(±5.2) 種であった。この値は「よく知っている」数の平均値よりも6.1種も多くなっている。

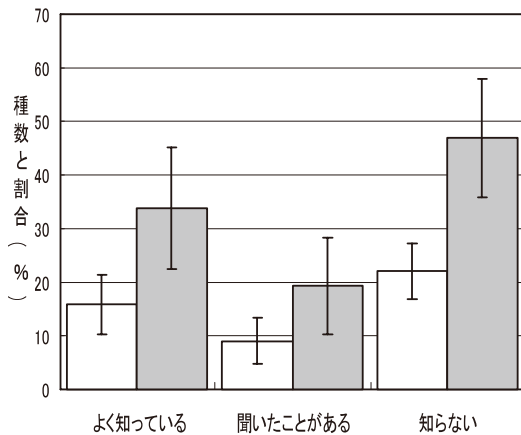


図-2. 幼稚園教諭の植物に対する知識量. 左は平均種数とSD、右は47種に対する割合(%)とSD.

今回実施した植物名の知識量に関する知識の調査では、「知らない種」の数をもっとも多く、次いで「よく知っている種」「聞いたことがある種」の順であった。「知らない種」の平均値は「知っている種」のその約1.4倍であり、「聞いたことがある種」の2.4倍に達した。

この結果は佐藤(2008, 2009)が短大保育科学生および幼稚園保護者についての調査結果と異なっている。たとえば「よく知っている」種の平均値は短大生が12.9種、保護者が17.9種、であったのに対して幼稚園新任教諭の結果は15.9種であり短大生と保護者の中間型であった。また、「知らない」種は学生が23.6種、保護者のほうが19.8種であったのに対して、幼稚園新任教諭では22.0種であり、「よく知っている」種数と同様、中間型であった。これらの結果に対して、「聞いたことがある」種に関しては短大生10.5種、保護者が9.3種であったのに対して、幼稚園新任教諭は9.1種を記録し、最も少ない結果となった。しかしながら、これら3つの集団の差は1.4種類でしかなく、「聞いたことがある」種に関してはそれほど大きな差は認められなかったといえる。

これらの知識量を47種類の何%に相当するかを図-2(右)に示したが、「よく知っている種」の割合は33.6±11.5% (短大保育科学生27.5±10.5%、幼稚園保護者38.1±13.3%、括弧内以下同じ)、「聞いたことがある種」は19.3±8.9% (22.2±9.1%、19.7±8.1%)、「知らない種」は46.8±11.1% (50.2±10.9%、42.1±13.9%)であった。「知らない種」と「聞いたことがある種」の割合を合計すると66.1%に達し、短大生(72.4%)よりも多く、幼稚園保護者(61.8%)よりも少ない値であった。これに対して「聞いたことがある」植物の割合は短大生と2.9%、幼稚園保護者と0.3%の差が生じたに過ぎなかった。

「よく知っている」種数を1としたとき他の項目がどの程度の割合になるのかを相対的にあらわしたものが表-1である。これを見ると、「聞いたことがある」種の割合が「知っている」種数に対して0.57であり、幼稚園保護者に近い値を示した。一方、「知らない」種数では幼稚園新任教諭は1.38でありやや保護者の結果に近い値を示したものの、ど

表-1. 「よく知っている種」の数を1としたときの短大生・幼稚園新任教諭・幼稚園保護者の植物名認識度：短大生・幼稚園保護者は佐藤(2008, 2009)による。

	よく知っている	聞いたことがある	知らない
保育科短大生	1	0.81	1.83
幼稚園新任教諭	1	0.57	1.38
幼稚園保護者	1	0.52	1.11

ちらかといえば中間型であった。

次にそれぞれの項目について、幼稚園新任教諭の植物知識量とその人数分布を図-3に示した。「よく知っている」では、11～15種の人数が最も多く91名(全体の39.2%、以下括弧内同じ)に達し、次いで21～25種が63名(27.2%)であった。短大生と比較すると、知っている数が11～15種で最も多い点では類似していた。しかしながら2番目に多い種数を見ると短大生では6～10種であったのに対して幼稚園新任教諭では16～20種である点が異なっている。同様に幼稚園保護者と比較すると、幼稚園保護者では16～20種を中心として11～15種および21～25種に幅広く分散しているのに対し、幼稚園新任教諭では11～15種に集中分布する傾向が見られた。「よく知っている」種数に関してはどちらかというと短大生に近い結果とみなされた。

次に「聞いたことがある」種数に関しては、幼稚園新任教諭では6～10種に顕著なピークが見られ94名(40.5%)に達した。この点では短大生も幼稚園保護者でも6～10種が最も多くなっており、2番目に多い種数も11～15種である点で一致していた。

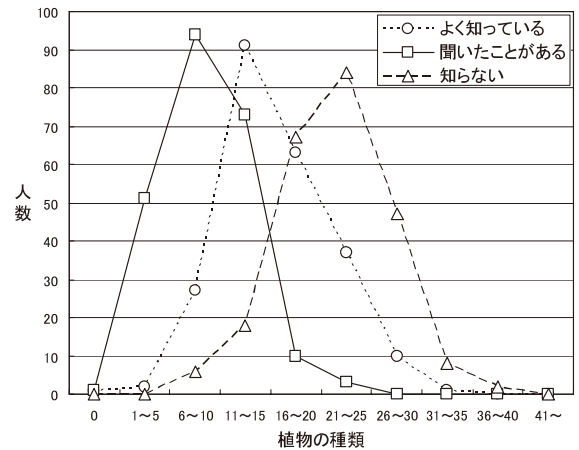


図-3. 幼稚園保護者の植物に対する知識量とその人数分布。

さらに「知らない」種数をみると、もっとも人数が多かったのが幼稚園新任教諭では21～25種で84名(46.2%)次いで16～20種が67名(28.9%)であった。これに対して、短大生では21～25種が最も多く、次いで16～20種であった。また幼稚園保護者では16～20種が最も多く、次いで21～25種であった。本調査の結果では、幼稚園新任教諭の値は幼稚園保護者よりも短大生に近いといえる。ただし、2番目に多い種数を比較すると、幼稚園新任教諭が16～20種であっ

たのに対して短大生では26～30種であり、やや幼稚園保護者寄りの数値となっている。

これらの結果から判断して、幼稚園新任教諭の植物知識は保護者と短大生の間型であるとみなすことができよう。もちろん、たとえば「聞いたことがある」種数などはどの集団も類似しているし、グラフの詳細を見ると保護者寄りであったり短大生に近い値であったりしているが、全体的に見て中間型と位置づけてもよいのではないと思われる。

3-3. 個々の種に対する認識

それぞれの植物について「よく知っている」と回答した幼稚園新任教諭の割合を認識度と規定し、値が高い順から種別に並べたのが図-4である。認識度が新任教諭全体の90%以上に達した植物はネコジャラシ (99.1%)、クローバー (98.7%)、イチヨウ (97.4%)、ススキ (95.2%)、ツバキ (95.2%)、クリ (91.8%)、の6種であった。一方、短大生では3種であり幼稚園保護者では7種であった。その内訳を見ると、クローバー、イチヨウ、ネコジャラシ、は短大生・保護者・新任教諭すべてに共通しており、クリ、ススキ、ツバキは新任教諭と保護者に共通していた。保護者で90%を超えたツツジは新任教諭の調査では87.4%であり、90%には及ばなかったものの認識度の高さで両者は類似していた。認識度50%を越える種は上記6種を含め15種存在し、短大生の12種と保護者の18種の中間値を示した。

これに対し、認識度が10%以下の種数は18種存在し、認識度0% (1人も知らない) はなく最低がコウヤマキの0.42%であった。短大生の認識度をみると10%以下が24種、0%のものが8種類あった。一方、幼稚園保護者では認識度10%以下が16種であり、0%の種はなかった。幼稚園新任教諭の認識度は幼稚園保護者に近い値であるといえる。基本的には、認識度の高い種から低い種への順位は保護者も短大生も類似の傾向にあったが、全体的に保護者のほうが高い数値を示し、グラフも緩やかな右肩下がりになる傾向であった。

本調査では同種異名のもの3種類 (ネコジャラシ＝エノコログサ、ツツジ＝オオムラサキ、クローバー＝シロツメクサ) を想定してその認識度を調べた。その結果を見ると、ネコジャラシ99.1%に対してエノコログサ2.6%、ツツジ87.4%に対してオオムラサキ25.1%、クローバー98.7%に対してシロツメクサ77.5%であり、クローバーとシロツメクサの認識度がもっとも差が小さかった。ただし、この結果は遊びの種類から判断して両者が同一種であることを認識していることには必ずしもならない。両方の名称がよく知られているという事実を示すに過ぎないと考えられる。これに対してネコジャラシとエノコログサでは明らかに俗名であるネコジャラシが一般的によく知られているが、和名であるエノコログサはほとんど認知されていないことがわかる。またツツジとオオムラサキは同一名ではないので他の2種と全く同じには扱えないが、オオムラサキを知っている人がかなり存在することが伺える。中には蝶のオオムラサキだと勘違いしている例も数名見られた。この結果から推察して、かなりの人数が蝶をイメージしていた可能性があり、今回のアンケート自体に問題があったと考えるべきかもしれない。

認識度が比較的高い植物でも、ミョウガは花の部分の薬味として食べた経験がある、という意味で知っている人が大部分であるように思われる。実際葉を使って草笛を鳴らした (吹いて鳴らす方法と吸って鳴らす方法がある) などの遊び経験を書いた人は全くいなかった。

カラスノエンドウの認識度は新任教諭では14番目に高く58.0%であったのに対し、短大生では28番目で31%、保護者では20%であり、新任教諭の値が顕著に高かった。これは恐らく、幼稚園で笛として (種子遊びも含む) 盛んに使用されている事による影響が出ているのかもしれない。今後精査する必要がある。

「聞いたことがある」種の割合を図-5に示した。グラフを見ると、50%を越えた種はサザンカとオオムラサキの2種であった。すでに触れたように、オオムラサキについては蝶の名称と混同している可能性があるのでここでは除外すること

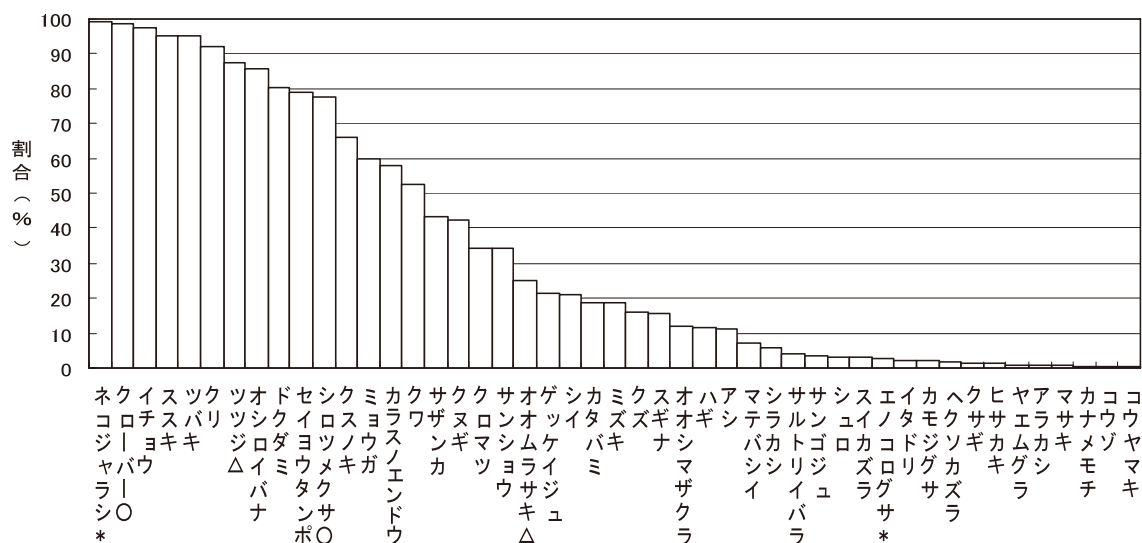


図-4. それぞれの植物種に対する幼稚園新任教諭の認識度 (知っている割合). ○、△、*はそれぞれ同じ種を示す。

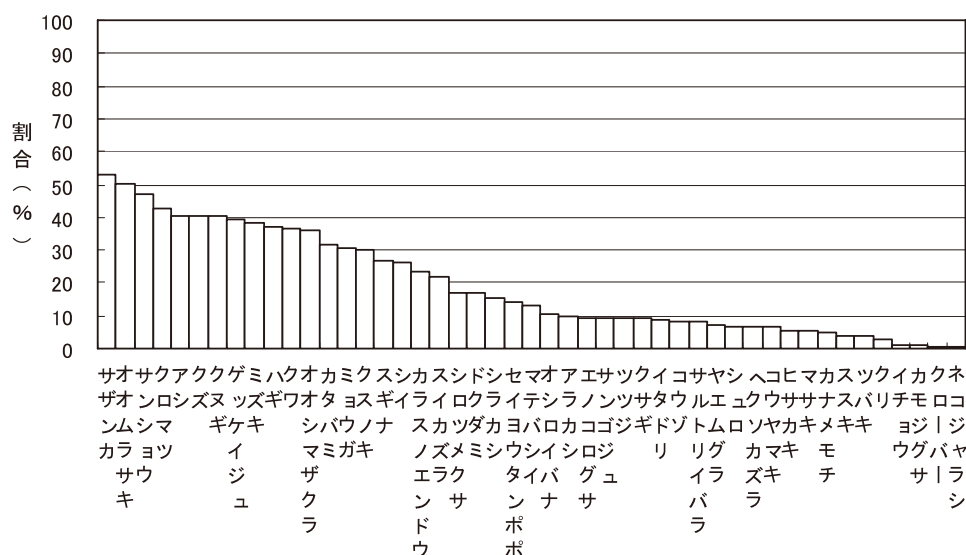


図-5. それぞれの植物種に対する幼稚園新任教諭の認識度 (聞いたことがある割合). ○、△、*はそれぞれ同じ種を示す.

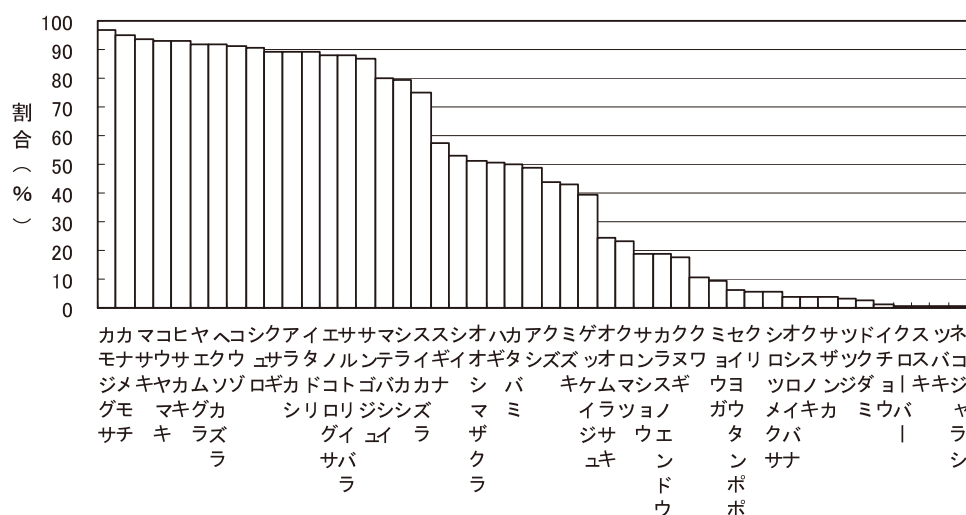


図-6. それぞれの植物種に対する幼稚園新任教諭の認識度 (知らない割合). ○、△、*はそれぞれ同じ種を示す.

とする。これに対して、短大生では5種が50%を越えていて(オオムラサキ、クワ、サザンカクヌギ、サンショウ)新任教員を上回っている。さらに幼稚園保護者では50%を越えた種は全く見られない。恐らく生活や保育体験の中で短大生以上に植物名を知っていることが理由として考えられる。

図-6は「知らない」と回答した新任教諭の数を割合の多い順に並べたものである。90%を超えたのはカモジグサ(97%)、カナメモチ(94.8%)、マサキ(93.9%)、コウヤマキ(93.2%)、ヒサカキ(93.1%)、ヤエムグラ(92.0%)、ヘクソカズラ(91.8%)、コウゾ(91.3%)、シュロ(90.5%)の順であり、合計9種であった。一方短大生では14種、幼稚園保護者では4種であり、新任教諭の値が両者の中間的な結果を示した。また、幼稚園教諭の間で知らない割合が90%を超えた種は、ほぼ短大生や幼稚園保護者の種と類似の傾向を示した。ヘクソカズラ、ヤエムグラなどは幼稚園周辺で恐らく普通に見られ、それを利用して臭いをかいだりワッペンなどにして遊べるだけに、知らない割合が多いことは残念であった。

3-4. 体験したことのある(知っている)遊びの数

幼稚園新任教諭がそれぞれ何種類程度の遊び経験(食べる、接したことがある、家にあるなどを含む)を持つか、自由記載された数を集計し図-7に示した。佐藤(2008, 2009)にならって、ここでは遊び体験の実数ではなく、体験のある植物の種数で表す。体験がもっとも多かった新任教諭の数は19種で1名(保護者は30種1名、短大生では21種1名)に過ぎなかった。逆にもっとも少なかったのは0種で86名(幼稚園保護者で25名、短大生では21名)を記録した。この結果は幼稚園保護者や短大生よりも顕著に多い。つまり植物名の認識度と比べて遊び体験が極端に少ない。同様に、一人当たりの平均は 3.52 ± 3.96 種(幼稚園保護者 7.53 ± 5.89 種、短大生では 5.3 ± 4.03 種)であり極端に少なかった。さらに、体験数0の人数の全体に対する割合は全体の37.1%(保護者12.1%、短大生10.6%)に達し、これまでの調査結果と比べて体験のない者の数が著しく多い傾向が示された。この原因に関しては、夏休み研修会という特別な企画の中で実施されたため記載時間が十分に取れなかった

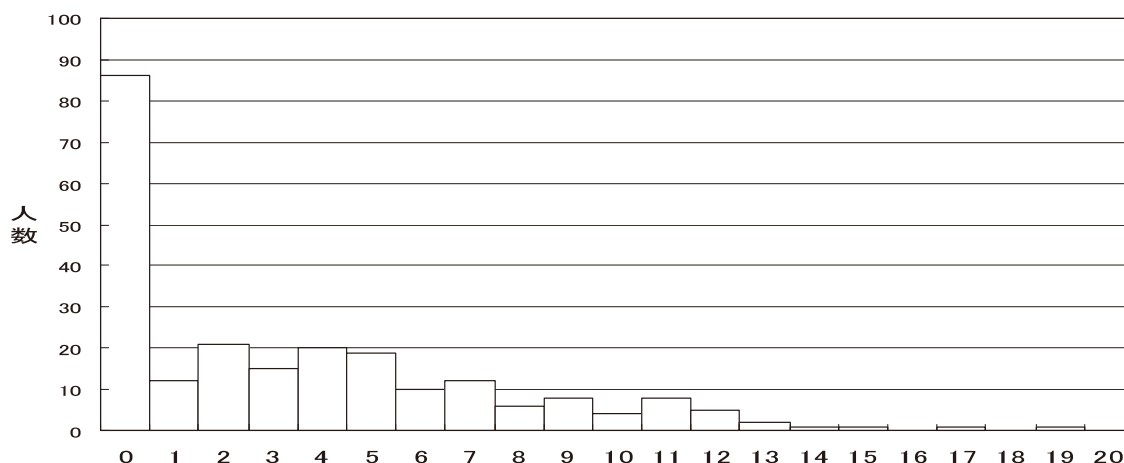


図-7. 一人当たり経験した遊び体験数とその頻度（人数）.

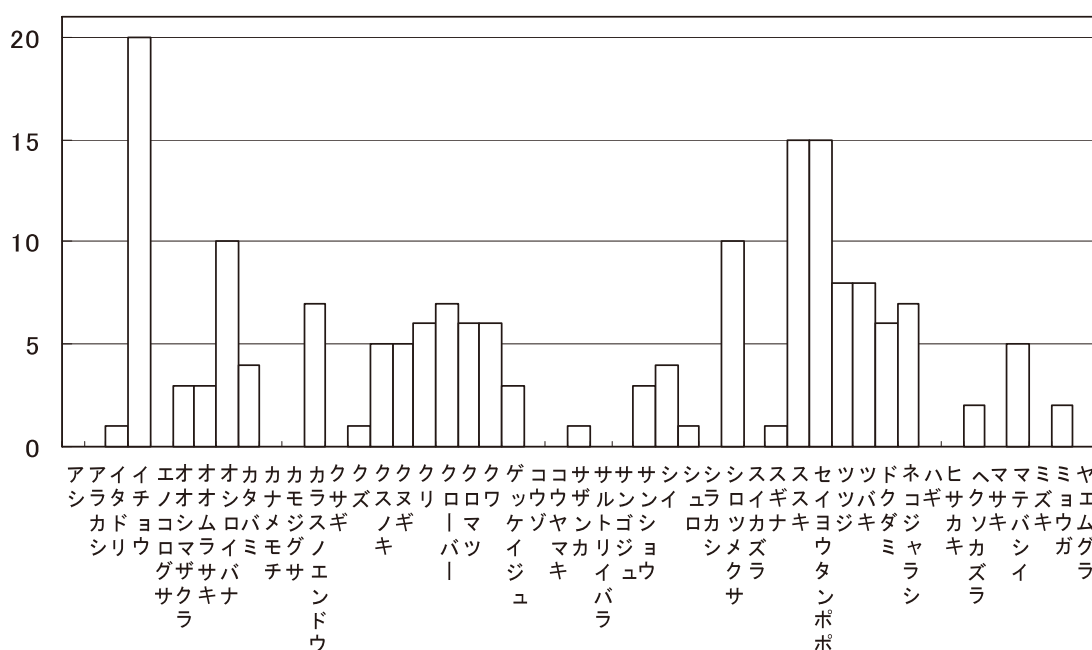


表-2. 遊び体験の多い植物上位 10 種の順位

順位	幼稚園新任教諭	幼稚園保護者	保育科短大生
1	ネコジャラシ	クローバー	クローバー
2	クローバー	イチョウ	ネコジャラシ
3	イチョウ	ネコジャラシ	イチョウ
4	ススキ	クリ	ススキ
5	ツバキ	ススキ	クリ
6	クリ	ツツジ	オシロイバナ
7	ツツジ	ツバキ	ツバキ
8	オシロイバナ	オシロイバナ	ドクダミ
9	ドクダミ	ドクダミ	セイヨウタンポポ
10	セイヨウタンポポ	セイヨウタンポポ	ツツジ

表-3. よく知っている植物 10 種の代表的な遊び

植物名	遊びの種類とそれぞれの経験人数
①ネコジャラシ エノコログサ	くすぐり 29、猫じゃらし 25、毛虫遊び 17、摘む 5
②クローバー シロツメクサ	四つ葉探し 73、しおり(押し葉) 15、冠作り 6 指輪作り 5 冠作り 62、ネックレス作り 12、腕輪作り 6
③イチョウ	絵や貼り絵など 22、銀杏食べ 11、葉を拾う 8、葉 7、銀杏拾い 6
④ススキ	月見の飾り 24、簪作り 10、ふくろう作り(みみずく) 6
⑤ツバキ	種集め 4
⑥クリ	食べた 37、栗拾い 7、イガ遊び(投げるなど) 5
⑦ツツジ オオムラサキ	蜜吸い 53、色水 5
⑧オシロイバナ	化粧(白粉) 37、色水作り 28、種つぶし(粉だし) 25、落下傘 8、 種取り(拾い) 6、ままごと 5
⑨ドクダミ	お茶 13、匂いかぎ 6
⑩セイヨウタンポポ	綿毛飛ばし 12、指輪 6、花摘み 6、腕時計(腕輪)作り 5、冠作り 5、 笛作り 5

クリを食べた経験には必ずしも自分で拾って食べた経験とは結びつかない可能性がある。またドクダミの「お茶」は自分で煎じて飲んだというよりも、市販の飲料物に含まれていることから体験として書いたのではないと思われる。ススキを月見の飾りとして用いるのは相当数の幼稚園で行われており、また家庭などでも比較的安定した習慣として定着しているものと考えられる。なおそれぞれの種ごとに幼稚園保護者や保育科短大生の結果と比較すると興味深いと思われるが紙面の関係上今回は割愛したい。

4. 考察

自然環境が子どもの成長にとって必要であり、それを取り入れた教育を充実させなければならないことは保育所指針や幼稚園教育要領を見るまでもなく重要である。しかし自然環境が子どもの周辺に充分用意されていたからといって必ずしも機能するとは限らない。自然の持つすばらしさ・恐ろしさ・面白さ・不思議さ・美しさなどの要素を子どもたちに体験させるためには、教育に携わる親や教師や周辺の人々が仲介者として積極的に働きかける必要がある。序

で述べたように、教育に携わる者は基本的な知識を持ち関わり方についてのある程度の訓練を積んでおくことが望ましい。

これらの点を考慮しながら、佐藤(2008、2009)は将来保育者となる短大生および子どもと直接かかわっている幼稚園児の保護者の植物に対する認識(名前の認知度と遊び体験の有無)について調査した。今回はその幅をさらに広げて幼稚園の新任教諭の認識とその特徴や問題点について考察してみたい。

4-1. 植物名の認知度

今回のアンケート調査に使用した鶴見大学およびその周辺で観察される植物は、横浜市あるいはより広く神奈川県平野部に比較的普通に見られるものである。幼稚園新任教諭のこれらの植物に対する「知っている」種数は平均15.9種であった。この結果は幼稚園保護者の認知度17.9種より少なく、短大保育科学学生の12.9種より多かった。短大生よりも多かった理由として、4年制大学を卒業した教諭がいたこと、半年であっても保育経験があり幼稚園によっ

ては自然環境に配慮した教育を心がけていることによる影響、などが考えられる。一方、「聞いたことがある」種数は幼稚園新任教諭では9.1種であり、短大生の10.5種、幼稚園保護者の9.3種であり、幼稚園新任教諭の数値が最も低かった。しかしながら、最も多い種数と少ない種数との差が1.4種でしかなく、ほぼ同数とみなしてよいと思われる。これに対して、全く「知らない」と答えた幼稚園新任教諭は平均22.0種であり、47種の46.8%に及び、短大生の23.6種よりは少ないが幼稚園保護者の19.8種よりは多かった。

知っている植物数を種別に調べたが、調査対象者の中で50%を越える認識度を記録したのは、15種/47種であった。これは保育科短大生12種/47種より多く、幼稚園保護者の18種よりも少なかった。それらの中で、ネコジャラシ（エノコログサ）、クローバー（シロツメクサ）、イチヨウ、ススキ、ツバキ、オシロイバナ、タンポポ、などは特によく知られていた。これらの植物は遊び体験も多く、保育現場でも頻繁に利用されていると考えられる。一方、カモジグサ、ヤエムグラ、シュロなどは認識度が低い、恐らく保育に活用できる植物ではないかと思われる。今後、さまざまな機会を通じてこれらの植物を認識してもらえよう工夫をすべきであろう。アラカシ、シラカシ、マテバシイ、スダジイ（シイ）などの堅果が利用できる樹木に対する認識が低い、実際の保育現場ではこれらが種名は認識されていないが、ドングリとしていっしょくたに認識されているのではないかと思われる。

今回の調査で明らかになった「知っている植物」種数が多いか少ないか、また保育者として十分な数だといえるか、というような点に関しては職場およびその周辺の環境との関連性を考慮しなければならない。また、日常的にどのような植物を取り入れて保育活動を行うか、という目標によっても変わるであろう。むしろ求められることは、自然を取り入れた教育に関心を持ち、子どもと自然との仲介者としての役割を強く認識することであろう。関心があれば、たとえば勤務する幼稚園や保育園の周辺の植物を日頃から観察しておく意識も生まれてくる。さらにそれらを保育にどのように活用するか、といった方法も模索されていくに違いない。

前迫（2006）は、「保育士養成校において自然環境や生物への理解をさらに深める授業が必要か」という問いに対して80%を超える保育所がその必要性を感じており、さらに「動植物に関する基本的知識の必要性」も30%を超えている、と報告しており、その重要性は今後増加するものと推定される。

4-2. 植物遊び体験

植物名を知っていることは保育者として重要であるが、ただ知識が豊富なだけでは子どもたちに自然と接する教育を推進することはできない。豊かな知識に裏打ちされつつ、これらの植物とどのように関わることができるか、が求められる。その一つの方法として植物遊びが重要なのではないだろうか。遊びの数（植物の種数で示した）について集

計したところ、1人当たりの遊び数はわずか平均3.5種であり、短大生の5.3種や幼稚園保護者の7.5種に比べて少なかった。さらに、全く記載しなかった保育者が90名近く（全体の37.1%）に達し、短大生（10.6%）や保護者（12.1%）よりも著しく大きな数字であった。今回の調査は、研修会の最中に実施されたものであり、時間や疲労度の関係によって十分に書ききれなかった結果であるとするれば、調査方法を工夫する必要がある。しかしながら、もしほぼ現状を把握しているとしたら、大きな課題があるといえるだろう。

4-3. 自然体験研修の必要性

保育者を目指す短大生・幼稚園保護者に加えて、今回新任の幼稚園教諭の植物知識や遊び体験について調査してきた。本調査は準備や内容など充分であるとはいいがたく、今後工夫を重ねていかななくてはならない。それらの点を考慮したとしても、今後配慮すべき点が示されると思う。

まず第1に、幼稚園新任教諭は植物に対する認識が低いと思われる。したがって、就職後の研修活動が必要であろう。幼稚園独自で行うもの、研修会などで学ぶもの、あるいは書物やインターネットを通して得るもの、など方法はいろいろあるが幼稚園の教諭が植物名を知りその遊びに関心を持つ必要があるのではないだろうか。

第2に、保育者養成校として将来保育者となる学生にどのような知識や技術を学ばせたらよいか、さらに養成校と幼稚園との連携のあり方、などについても今後模索していかななくてはならない。

5. 参考文献

- 井田秀行・青木舞、2006、教員養成系大学生の身近な自然観とそれに応じた支援教育、保全生態学研究11(2)：105-114.
- 井上美智子、2002、現職幼稚園教諭の環境問題及び自然に対する関心と実践の実態に関する調査研究、近畿福祉大学紀要7(2)：61-66.
- 井上美智子、2005、保育者養成系短期大学の一般教育科目における環境教育の実施実態、近畿福祉大学紀要6(2)：73-78.
- 井上美智子、2006、保育者養成系短期大学の「総合演習」における環境教育の実施実態、Ibid. 7(2)：61-66.
- 井上美智子、2007、保育者養成系短期大学における環境教育の実施実態、環境教育17(1)：1-12.
- 大澤力編、2008、体験・実践・事例に基づく保育内容「環境」―身近な自然・社会とのかかわり―、保育出版社：1-210.
- 太田雅子、2004、保育における環境教育のあり方について、北陸学院短期大学紀要35：13-22.
- 神山種子・松井孝・長尾マユ・熊坂望、1996、幼児期の環境教育に関する研究―幼児教育科学生の意識―、日本保育学会大会発表論文抄録49：760-761.
- 北野日出男・樋口利彦編、2002、自然との共生をめざす環境学習、玉川大学出版部：1-224.
- 厚生労働省、2008、保育所保育指針.
- 渋谷香奈子・藤吉正明、2006、環境教育のための草花遊びの重要性、東海大学教養学部紀要37：213-225.
- 田尻由美子・無藤隆、2005、幼稚園・保育所における「自然に親しむ保育」を中心とした環境教育のあり方について、環境教育15(1)：11-20.

- 田尻由美子・井上美智子・石坂孝喜・落合進・高田憲治・林幸治、2002、子どもの発達と環境にかかわる保育を考える ―保育内容環境における環境教育的視点をもった実践的指導とは―、日本保育学会大会発表論文抄録55：32-33.
- 久居宣夫、1983、自然に対する関心度についてのアンケート調査結果、自然教育園報告14：19-47.
- 佐藤英文、2008、短大保育科学生の植物知識に関する調査、鶴見大学紀要、第45号（3部）保育・歯科衛生編33-41.
- 佐藤英文、2009、幼稚園児保護者の植物知識に関する調査、鶴見大学紀要、第46号（3部）保育・歯科衛生編69-76.
- 布施谷節子・小菅充子・中島明子・名取史織・三善勝代、2002、三世代にわたる生活文化の伝承と将来への展望（Ⅲ）―男子学生と女子学生の比較―、和洋女子大学紀要（家政系）42：109-124.
- 藤樫道也・岩崎婉子・関口準・松井孝・神山種子、1996、幼稚園における環境教育（5）―保育者への意識調査より―、Ibid. 49：454-455.
- 藤木悦子、2004、保育科学生の植物観、福岡女子短大紀要64：53-65.
- 細井香・内海崎貴子・野尻裕子・栗原泰子、2007、保育者養成過程学生の幼児期の遊び体験について、川村学園女子大学研究紀要18(2)：121-132.
- 前迫ゆり、2006、環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育、奈良佐保短期大学研究紀要14：63-81.
- 文部科学省、2008、幼稚園教育要領.

